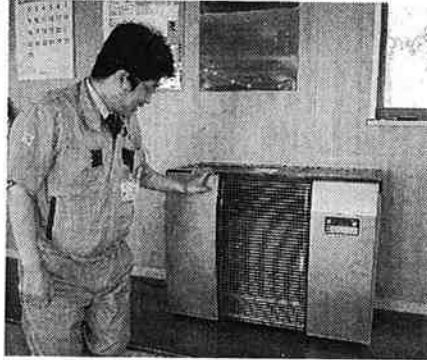


ハイブリッド型トラックの導入

公共工事現場にも環境対策の広がり

公共工事の現場でも、環境負荷低減や二酸化炭素の排出抑制に取り組み動きが広がっている。発注機関側が環境対策を評価項目の一つに採用したことも、これを後押ししている。さまざまな資機材を提供するレンタル会社側も、このニーズに対応し、環境対策製品の積極的な提案を進めつつある。環境対策製品の取り扱い強化を図るカナモトが、環境製品の導入モデルとして位置付ける道興加茂・開発工建・三和工業共同体(加藤健一所長)を取材した。

道興加茂・開発工建・三和工業 道央圏連絡道路工事現場を取材



事務所に設置したペレットストーブ。窓から見える炎も暖かみを感じさせる。



導入したハイブリッド型2tトラック。いすゞ自動車製

道興加茂ら共同体は、道央圏連絡道路工事(札幌開建発注)の二環で江別市美原地区で、盛り土を展開中だ。現場では、二酸化炭素の排出抑制に向け、環境省が開展する「チームマイナス6%」の取り組みに参加。事務所では、エアコンの利用を抑えたほか、作業員に廃棄物リサイクルの意識付けを進めている。

ハード面でも環境対策製品の採用を考え、カナモトに相談。札幌南営業所(菊地大介所長)の提案で、ハイブリッド型2tトラック、太陽電池を利用したLED道路標識板、木質ペレットを燃料にするペレットストーブ、バイオトイレを導入した。

加藤所長は「まずはできることから。無理せず使えるものから始めようと考えた」と説明する。ハイブリッド型のトラックは、いすゞ自動車製の「エルフ」。バッテリーとディーゼルエンジン

を組み合わせたもので、アイドリング時にはエンジンが自動で停止する。ディーゼルのみに比べ、約35%の燃費向上を図り、CO₂排出を25%低減。排出ガスのPM、NOxも規制値を大きく下回り、近隣の農作地帯に負荷が少ないと考えた。

一方、ペレットストーブは、燃料の木質ペレットが、廃材の有効活用とともに、カーボンニュートラルな性質から地球への負荷が少ないとされる。バイオトイレは、微生物やオカズを使ってふん尿を分解し、有機肥料化。水を使わず再資源化が可能だ。

朝晩の冷え込みには、ペレットストーブが出勤。「燃料が高騰する今の状況では、ペレットのほうが安くなる(加藤所長)。ただ、冬場も現在配置する2台で暖房能力が足りるのかどうか、ペレットの灰をどう有効活用するか。環境対策は使った終わりではない。資源が循環する形をどのようにするか。灰は、周辺農家に肥料や冬季の散布材として配布することも考えている」。知恵の絞りどころだ。

車両は事務所と現場の資材輸送とともに発電機不要でクリーンなソーラー型標識板を搭載し、現場の車両誘導に用いた。組み合わせ相乗効果をねらう。

できることから取り組んだ現場の環境対策。加藤所長は運用のポイントとして「現場の未端まで、省エネやリサイクルの意識を浸透させていくことが必要だが、これが難しい」と感じている。

上司の成田慎二道興加茂執行役員工事部長も「まずは、環境製品を使い意識改革を進め、本当に達成できたか検証し、次のステップにつなげる必要がある。現場に環境を定着させるためには、現場に即した良い製品が必要」と話す。

モト側に「現場の声」を伝え、成果が現場に戻ってほしいと期待する。カナモト側もこうした、

現場とのやりとりを通じて、より現場に即した製品の提供、提案を進めていくという。

今回導入した製品でも、改善の余地はある。同社では今後、環境製品運用の検証を行い、カナ

モト側に「現場の声」を伝え、成果が現場に戻ってほしいと期待する。カナモト側もこうした、

現場とのやりとりを通じて、より現場に即した製品の提供、提案を進めていくという。

今回導入した製品でも、改善の余地はある。同社では今後、環境製品運用の検証を行い、カナ